祝島ネット21会報

いわいしま通信

第３４号

発行日
２０１０年 １０月 １５日

第8回祝島不老長寿マラソンを開催しました

8月29日（日）に夏の恒例行事「第8回祝島不老長寿マラソン」を開催しました。出場者は最年少4歳から最年長81歳まで、2kmと13kmの部に合計156名のランナーが出場され、全員無事に完走されました。今年の夏ははは猛暑が続いていたので、どうなるか心配でしたが、無事に終わってホッとしています。

2001年から始まったこの大会、祝島の皆さんをはじめ、多くのボランティアの方々に支えられて、ランナーの皆さんには大変人気のある大会に成長しましたが、諸事情により今回が最後の大会になりました。10年間、ご協力ありがとうございました。

4人で元気に選手宣誓

13kmの部のスタート

急坂を駆け上がる

小祝島をバックに

13km男子の部 優勝の林田さん

最年長81歳の清水さん

目　次

祝島不老長寿マラソン	1
祝島の歴史を探る	2
花＊花クイズ	3
会員リレーコラム	4
ふるさとを思う	6
魚・さかな・肴	7
絵っきー展覧会	7
「祝島の記憶」写真展	8
44年ぶりに祝島を訪ねて	9
せきれい	10
マラソン大会を終えて	11
お知らせ&募集	12
編集後記	12

祝島物語　　絵・しげむらみちこ

＜連載＞ 祝島の歴史を探る(34)　～祝島の“みせや”～

蛭子　葉子

先日43年前の写真展を開いてくれた当時大阪府立大の白井さん達より4年後に来られた福岡・城南高校郷土研究部の続編です。白井さんの写真にもお店の前でおしゃべりするおばさんや子供達の写真がありましたが、当時はたこ焼き屋や氷屋、貸本屋など子供の好きなお店もたくさんありましたよね。三藤や貸本屋のタロイからかき氷の村岡、衣料品店の並ぶ通りは「祝島銀座」と呼ばれ賑わっていました。そんな当時の様子が書かれています。

この島には他の島々に見る事のできないいくつかの特色がある。たとえば人口の割に商店が多いという点、また商店の種類も比較的多く、衣料品店、菓子製造所もあるという事なのだ。またこの島の経済の中心が漁業であるから漁業の好不漁による影響がかなり大きく、衣料品店においては特に売れ行きの変動も大きい。これら商店の商品は島内の三軒（土井・福本・石丸）の運送業者及び太陽汽船等によって大部分柳井市より仕入れられる。しかし衣料品は品質がよく品数が多くそろっているということで広島から仕入れられる。乾物は島内の一軒の卸屋に仕入れられる。

一、雑貨屋

この島では数も多い。店によっては氷屋、軽食堂等を併設している。この島の雑貨屋の数は三十四軒～三十五軒、島の人口約二千人に比べるとなんと四〇人に一軒。十二～十三世帯に一軒の割合である。そこで数軒まわった店の中から共通の特色をあげてみた。まず酒類について。終戦直後は焼酎が多かったが現在は一級酒、二級酒、特級酒、ウィスキーが中心で二級酒の影はだんだんうすれている。やはり高級化しているらしい。次にタバコについて。これは高級品とそうでないものを買う人にわけることができ、中間程度の物はさっぱりだという。売れ行きでは、一般にハイライトがトップで冬には安いエコー、しんせいがよく売れ、夏にはセブンスター等の高級品がよく売れ、冬の倍も売れるという事だ。また老人と若い人（この島では、三〇才すぎの男性も若い人に入れるようである）によって買われるタバコも違うそうである。若い人はハイライト等を好み、新しい種類がでるとすぐ買うらしい。しかし老人はバット、ききょう（きざみタバコ）のようなクラシックな物を好むという事である。物価については確かに運送料によって野菜等は高くなっている。しかしある店で聞いたことには「本土に行ったついでに」ということで向こうで買ってこられるため、柳井市と同じかむしろそれより安くすることもあるらしい。やはりこういう所に商業のむつかしさがあるようだ。

えびす屋の前で貸本を回し読みする女子生徒たち
（白井さん撮影）

二、卸し屋（福本・岡垣という平生から来た人がやっている乾物屋もあったそうです）

四、五年前に開業されたそうである。

三、衣料品店（安藤・西岡・難波）

島の中に三軒もある。物価が高いという事であるが、結構売れるらしい。店内には子供服、水着、女性用夏服等、種類は多かった。

四、菓子製造所（出田・橋本）

八～十年前に始められ、家族労働によって生産されている。種類としては給食用パン、菓子パン、生菓子、ケーキ等を作っている。島の需要は十年前より倍増しているが需要がこの島に限られており、原料費等の運賃が高くつく。人口の減少に伴い、小中学校の児童数が減り給食用パンの増加もないのでこれ以上増産は望めない。

五、豆腐製造所（江本・江本）

島に二軒あり生産している個数は割と少なく一日に百三十～百六十丁という事である。

六、鉄工所（岩本・西山・森田）
　三軒の鉄工所があり、それらは戦後始めたもので漁船等のエンジン修理、交換等の仕事をしている。

　写真を撮られた白井さんが子供達の着ている服の良さに感心しておられましたが当時は仕立て屋さんが何件かあり，お祭りやお盆には新しい洋服や浴衣をおろすという習慣もありました。私の場合は近所の江本のやーちゃんに洋服を，原田はるのさんに浴衣着物を縫ってもらっていました。
　えびす屋も当時朝は6時頃から夜は11時頃まで営業していました。それでも朝店を開けるときには店が開くのを待ちきれずに豆腐を持って行った人の代金が豆腐箱に入っていて、時には預かりの豆腐まで無くなってお客さんからおこられるということもありました。（私はその豆腐の角を取るようないけずな子供だったようです。）氷や焼き饅頭も販売していたそうで小学生の頃学校帰りに通った出田の焼き饅頭の道具はえびす屋のものだったということを今回初めて知りました。アイスクリームは守重と国弘からとっていました。守重は私達が生まれる頃には営業されていたそうで種類は多くないけれど自家製（！）だったそうです。そういえば国弘はキャンデー屋とも呼ばれていましたよね。うどんも作っていて年末だけ年越しそばを作ってくれました。あのもちもちしたよばれのうどんも祝島名物として復活してほしいです。松野のたこ焼や味のしみこんだ三角稲荷も今なら食べログの王者かもしれませんね。と、其々のお店のことも書けばきりがありませんのでこの辺で。

かつての「祝島銀座」では、ネコがのんびり昼寝

＜連載＞花*花クイズ(33)

橋部　好明

　前回の花・花クイズの答えはハマナタマメでした。
　この花は、海岸に生えるつる状の多年草です。茎は地上を這って5㍍くらい伸び、葉は楕円形または広倒卵形で葉質は厚い。花は淡紅紫色の蝶形花、祝島三浦湾の同じところに白花も咲いていましたが、平成3年の19号台風で流されて、それ以後残念ながら白花は咲かなくなりました。

　さて、今月の花の名は？
　畑や道端の乾燥したところでよく見かけます。
　葉が肉質なので乾燥に強い種なのかもしれません。食用にもなると言われていますが・・・。

会員リレーコラム(34)　　～ 鳥羽　功 さん ～

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。第34回目は、祝島出身で現在は鳥取県にお住まいの鳥羽（旧姓薬師）功さんです。

現在施工中の濁水処理設備の前で

◎中学時代までの想い出

私はこのたび、おかげさまで還暦を迎えることができ、生まれて60年間という年月を無事過ごすことができました。このうちの4分の1の15年間、中学時代までを生まれ故郷の祝島で過ごしました。最近、年をとるにつれて故郷が恋しくなって、帰省する回数も以前よりは、増えて来たような気がします。私の生まれた年は、終戦5年後にあたり、私達の3学年上は、終戦後のベビーブーム時代に生まれた人たちで、3クラスあり、120人くらいいたと覚えております。今では信じられないくらいの小中学生の数でした。

その時のおもかげを残しているのは、小中学校の校舎と改築されたかもしれませんが、給食室と便所くらいだと思います。小学生の時は、14か16インチの白黒テレビが島中でも数えるほどしかなく、大相撲は公民館の2階で料金箱に5円か10円か入れて見せてもらったのを覚えております。紅白歌合戦は、公民館の1階の広間にたくさんの人が集まって1台のテレビに見入っていたと覚えております。当時は、プロレスブームで、力道山という英雄が、宝力空手チョップで最後に外人プロレスラーをノックアウトするシーンを見るために同じように料金を払って集まって見せてもらいました。

島民の数が多く、イベント一つ一つが盛大に行われておりました。公民館での学芸会の見物する人たちの数の多かったことは、幼少時代なりに頭に刻み込まれております。運動会も盛大に行われ、見物人の席取りのため、前日に「むしろ」か「ござ」を敷いておいたりしておりました。当日になると、見る場所がなく、グラウンドの上の畑から見る人もいたほどでした。

小学生高学年の頃から、地区でソフトボールのチームを作り、学校のグラウンドで、たびたび対抗試合を行っておりました。当時は今通常に使われているソフトボール球より一回り小さいのを使っており、よく飛び、学校のグラウンドがレフトが広く、ライトが狭いので、祝島ホームラン、祝島ヒットなどの言葉も生まれました。

中学生の頃は、クラブ活動は野球、柔道、卓球、バレー、テニスがあり、放課後や休日の午後はあの狭いグラウンドをいっぱいに使って練習しておりました。帰省のたびに学校に上がりますが、昔の賑やかだったグラウンドが一番懐かしく思われます。

◎私の近況について

私は学生時代を含め、山陰の鳥取市で約33年間生活しております。最近は少なくなりましたが、20年ほど前は、雪が多く、50cmの積雪なんて冬になれば当たり前みたいに降っておりました。スノータイヤで帰省して駐車場に車を留めていた時、どこかの子供が、「お母さん、このタイヤ変わっているね。」と言っていたのを耳にしたことがありました。山陰では1年のうち、最低4ヶ月はスノータイヤを履かないと運転

現在の学校の運動場

できません。山口県と鳥取県はたいして離れていないのにこんなに気候が違うのかなあとよく思います。私は、ずっと建設業に携わって来ましたが、最近の公共事業の減少により、従来の受注高は望めなくなり、この10年間は環境事業の部門を担当してきました。環境事業と言えば大気汚染、土壌汚染、水環境、地球温暖化防止のためのエネルギー問題等、広範囲にわたる課題がありますが、継続的に利潤を得ることの難しい部門であることは事実です。私が現在取り組んでいるのは、現場で発生する濁水処理、工場廃水処理、その他ヒ素・PCB等の難処理水の処理、また農業集落排水処理場の余剰汚泥減容化施設を試験検証中であり、これは処理場の汚泥を完全に汲み取り不要にするための施設です。その他、予算が確保できないため休止している波力発電事業化との関わり、また山陰沖の海上に建設予定している洋上風力発電の計画、これは大学の教授を中心としたプロジェクトチームを組み、現在計画風力で電力が供給できるかどうかの風況調査を開始するところで、私も微力ながらメンバーに入り、本格的に動き出したところです。

祝島での必要電力は、原発に頼らなくても他の太陽熱、風力、波力等の自然エネルギーでまかなえるのではないかと思います。

◎愛する祝島

私は、毎日職場の席に着いたら、祝島ホームページを開くことから始まります。故郷では、この2日、３日間また昨日はどういうことがあったのだろうか。すごく、私にとっては、1日のエネルギー源になっております。ホームページを更新される方々の日々の労力には、頭が下がる思いです。最近、私の町内会や友人から祝島のことが報道された、記事に載っていたとか、盛んに聞くようになりました。たいへん喜ばしいことで、これは、祝島を愛する人たちの努力の賜物だと思っております。4年に1回の神舞、上関原発の問題、平さんの棚田、不老長寿マラソン、氏本農園、祝島の映画化、特産物、歴史など島の知名度を挙げる要因がたくさんありますが、労を惜しまず、企画運営される方々、情報を流される方々のおかげだと思います。

これからの祝島・・すばらしい海、山の自然の恵みを持った島を生かし、若者が日々元気に働ける場はないだろうか。昔からの固定観念を持たず、自然の利を生かし、ちょっとしたアイデアで、生活ができる方法があるのでは、と私は常々思っております。特に農林水産業に目を向けるべきだと思います。

私は、祝島を愛するがために、これから帰省することが以前に増して多くなると思います。今後ともよろしく、お願いいたします。

＜鳥取市在住　鳥羽　功　(祝島出身)＞

道路工事現場での濁水処理の工法説明

鳥取港沖での波力発電実証試験（UFO型）

鳥取港沖での波力発電実証試験（パイプ式）
積み込み前　岸壁で

＜連載＞ ふるさとを思う（3）

瀬戸 こうじ

祝島出身の歌手・瀬戸こうじさんのコラム、今回が3回目です。

こんにちは、瀬戸こうじ(河下正信)です。今年の夏は暑かったですね、そして暦は秋になりましたが、まだまだ暑いですね。この記事を読んで頂ける頃が、秋雨も降り、涼しい心地に浸っている頃だといいのですが。

10年続いた『祝島不老長寿マラソン』も今年が最後であったとのことですが、このイベントの活動で祝島を多くの皆様に知ってもらえたことでしょう。暑いシーズンのイベントであり、関係者の皆様には大変にお疲れ様でした。祝島に、また新たなイベントへの挑戦が始まることを内心密かに、願っています。

僕は50歳代も終わりの頃になって、自分の人生を省みる機会があり、『このままで終わっていいのだろうか。何もない平凡な生き方でよかったのだろうか。何かやり残していることはないのだろうか。今ならまだ間に合うのではないだろうか。故郷のために何かしたい、何ができるのだろうか。』などと自問自答が繰り返される中で、『祝島讃歌』を作るチャンスに巡り合いました。そして、『祝島讃歌』を唄う活動をしているうちに、いつの間にか自分の故郷の宣伝が始まっていることに気が付きました。

僕にとっての祝島は、子供時代の楽しい生活の場所であり、自立する為のつらい悲しい別れの思い出の場所でした。両親と親戚の住む島でした。なにもかもが当然のように与えられたものだと思っていました。そんな漠然とした故郷への思いが『祝島讃歌』との出会いで変わっていきました。

当たり前のように4年に一度迎えていた『神舞』に1110余年も続く人の心と心のつながりの歴史があることを改めて学び、海の幸や山の幸の守り続けられた豊かな自然に囲まれていたことに感謝が生まれ、棚田や練塀を作り上げた強くたくましい生活があることを改めて見つめることができ、僕の中で祝島の再発見になり、いつしかそれらのことが誇りに感じられるようになりました。そして、この誇れるものを多くの皆様に知っていただきたいと思うようになったのです。

過疎化が進む中、現実に真っ向から立ち向かい、島を必死で守りつづけている島民の皆様にエールを送りたいと思う気持ちが、還暦を迎える年になった私の背中を押し、一歩前へ、歌手への決意となりました。僕は寅年なので還暦になるに当たり『虎穴に入らずんば虎子を得ず』のことわざを、『もう還暦だからといって守りに入って何もしないでいるのは、僕の人生にとっては無駄に月日を過ごしてしまう大きな損失になるのではないだろうか』と解釈させてもらいました。

食材にも旬があるように人生にも旬があると思います。たとえば「大器晩成型」とか、「第二の人生」とかいろいろ表現はありますが、各人、輝ける時期が違うと思います。子供の頃は目立たなかったのに大会社の社長になったとか、ガキ大将が議員さんになったとか、想像もつかない人生があったりします。祝島にも成功されていらっしゃる方がおられるとも聞いています。

人生は個人の努力も大切ですし、自ら切り開くことも可能でしょう。そしてまた、人との巡り合いで変わっていくとも思います。僕は『祝島讃歌』と巡り合い、作詞、作曲の先生との巡り会い、人との関わりを大事にしていくことの大切さを今更ながらに感じています。こうして投稿させていただける、『ネット21』との巡り合いにも感謝しております。

「遅すぎることはない、今が僕の旬だ」 と信じ、歌い、一人でも多くの人に出会い、故郷祝島をご案内しながら、６０代を謳歌していきたいと思っております。 そして、祝島を皆様と語り、『祝島讃歌』を皆様と歌い、祝島らしいはじける笑い声と笑顔！そんな時間を持てるように頑張ってまいります。

＜連載＞魚・さかな・肴(33)　～ フトラズ ～

木村 力

子どもの頃、夏に潮が起きるといつも磯に行っていました。その磯で良く捕る楽しみがタコやサザイ、フトラズでした。

フトラズは、トコブシと呼ばれるようです。祝島の名前フトラズは多分、アワビとそっくりだけどアワビほど大きくならないので、そう呼ばれているのでしょう。

フトラズ

形はアワビとよく似ているけど凹凸が少なく、特に穴のある部分の突起が無いので、すぐ見分けられます。色も少し淡い感じで小さく穏やかなアワビです。

前トビイシの浅い瀬の狭い割れ目などによくいたのですが、この頃見たことがありませんでした。この夏小島の磯で石をはぐったら、久し振りに小さいフトラズに出会いました。

子どもの頃、前トビイシに行った帰りには、フトラズの穴に針金を通して、沢山ぶら下げていました。

食べ方は普通煮て食べます。磯では焼いたり、生を塩水で洗って食べていました。刺身にするにはちょっと小さすぎます。身はアワビより軟らかく、味はよく似ています。

フトラズの煮物

絵っきー展覧会(3)　『犬のマキちゃん』

エッキー浴野

マキちゃん、氏本さんのバイクのうしろの箱に乗ってる。気持ち良さそうー。

氏本さんが島外へおでかけのときは、たかちゃんの自転車の荷台の箱に乗ってるマキ。「気持ちイイー。」

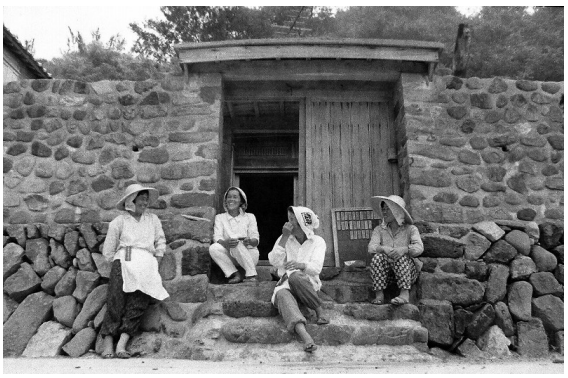
「祝島の記憶」写真展を開催しました

8月13日～15日の三日間、祝島公民館の2階和室にて「祝島の記憶」写真展を開催しました。昭和41年の夏に、祝島で夏合宿をされた大阪府立大学写真部の部員だった白井淳一さんが当時撮影された写真およそ80点を展示しました。

会場には、島のお年寄りや、お盆の帰省客など多くの方が写真展を見に来られました。当時の島の様子は、年配の方にはとても懐かしく、若い方にはとても新鮮に映ったようです。

白井さんは、「当時、総勢20数名でみさき旅館に泊まり、祝島の暮らしをカメラに収めました。島の漁業や農業、練塀で囲まれた家々や子供たちなどにレンズを向けましたが、青い空と豊饒の海に囲まれた祝島には、元気な子供たちの歓声とお年寄りの笑い声があふれていました。」と44年前を振り返られていました。

展示された写真の中からいくつか紹介します。



【来場者の感想より】

◎今も残っている風景も、もう失ってしまった風景も、すべて懐かしく感じました。ほんの少し前まで、「おいこ」を背負ったお年寄りの方が、たくさん山の方から歩いてきてました。島が少しでも元気でありますように。

◎母の若いころの写真を見つけました。3年前に96歳で他界。懐かしい母に会えました。ありがとう。

◆展示された写真は白井さんのブログでご覧いただくことができます。

http://sanyohirakata.at.webry.info/201006/article_4.html

＜特別寄稿＞44年ぶりに祝島を訪ねて

白井　淳一

写真展会場にて祝島ネット21のメンバーと記念撮影。
一番右が白井さん。

このたび、祝島ネット21の皆さんとの出会いで、「祝島の記憶」写真展を開催する機会を与えられましたことを嬉しく思います。また、この写真展の事前準備や、会場の設営に、國弘さんほか多くの方のご協力を得ましたことに、厚くお礼も申し上げます。

ご来場いただいた多くの方に、写真を見て当時を思い出し、感激していただけたことに、この写真展をやって本当によかったなあと思います。

昭和41年の8月に、祝島で大阪府立大学写真部の夏合宿を行って以来、44年間もの間、私の記憶から消えていた祝島ですが、 ふとしたことから祝島ネット21の存在を知り、國弘さんとの出会いがあり、このように写真展が開催できたことは偶然とはいえ、何か因縁めいたものを感じずにはいられません。

今回、写真展を祝島で開催するにあたり、どうしても現地を訪問したいという強い思いがあった反面、心の中に描いていた祝島と、現実との間に、大きなギャップがあって、ショックを受けるのではないかという不安もありました。先日「祝の島」の映画を見て、およその島の雰囲気は見て取れたものの、実際祝島に来てみて、当時の面影を残す部分と、そうでない部分とが入り乱れていて、懐かしくもあり、ちょっと違うなという不思議な感覚にとらわれました。ちょうど、タイムマシーンの時間軸の設定を間違えたかのような不思議な錯覚を覚えました。当時集落を囲んでいた石積みや練り塀の重厚さに比べ、修復がなされるたびにその重厚さは薄れ、近代的に修復されているように感じましたが、それが時代の流れというものなんでしょうね…。

でも、島の人との会話や、話されている言葉を聴くうちに、当時路地に響いていた笑い声が蘇ってきて、ほっとしたのも事実です。ただ、当時のように、自由奔放な子供達の姿が見えないのと、路地に集う人影が少ない…これも時代の流れといえばそれまでですが、当時の活気が薄れていると感じました。

今回の滞在は、わずか1日半でしたが、島の人の人間味、温かさ、人なつこさは今も変わらず、綿々と受け継がれているように感じました。

海に囲まれたこの島の自然に逆らうことなく、破壊することなく環境を守りながら黙々と日々を大切に暮らす…。自分もこのようにありたいと、しみじみ思う旅となりました。

ありがとう祝島、ありがとう祝島の皆さん、祝島に心を寄せる皆さん、またどこかでお会いしましょう。

今回の写真展が、今失われようとしている事柄にブレーキがかかり、大切に伝承されていくきっかけになれば、この上ない喜びであります。

平成22年8月16日
白　井　淳　一

写真展の様子

＜連載＞ せきれい（3） ～祝島の小さな詩人たち～

石川 芳己

記録的な猛暑が続いた今年の夏も流石に9月半ばとなれば秋の気配に変わろうとしている。週に4日ほどであるが、午前8時過ぎ頃、徳山から光まで、通勤のために国道188号を東に向かって走行する。下松市の恋ヶ浜付近にさしかかると、瀬戸内海に祝島が見える。何時見ても懐かしい風景である。青い海に青い島影が見えると、心から安堵感を覚える。天候によっては島影も見えない日がある。その日は寂しいきがする。

このほど、平成22年度の草炎全国俳句大会にあたり、祝島小学校から全児童4名の応募作品が届いた。誠に嬉しい限りである。

昨秋に35年ぶりに祝島を訪れ、小学校で俳句の指導をさせていただいた。その後、子どもたちの作った俳句がファックスで送信されてきた。添削して返信したりと、しばらくは俳句を通した交流が続いた。

年が改まり、新学期になって、それぞれに進級した子どもたちに、4月の祝島クルーズで会ったのは、5ヶ月も前のことである。子どもたちの俳句作りもしばらく遠ざかっていたのであろうか。そうしたことから、今回の俳句の応募は、嬉しいのである。あれから祝島の子どもたちの俳句作りが続いているのである。

子どもたちの俳句作品を紹介してみよう。

雨のつぶあじさい染める絵の具かな

６年　蛭子　みさき

紫陽花は「七変化」と謂われるほどに花の色が変わる。その花の色は雨粒の絵の具により描かれたという。雨粒を染料の絵の具に見立てた着眼が素晴らしいと謂えよう。

初夏の日にまっさおな海目に入る

５年　村田　美月

初夏の海の真っ青な青さを的確に表現している。「目に入る」の坐五が効いている。祝島の周囲はあくまでも青い海。その青さが目に浮かぶようである。

つゆの日にお日様顔をあらってる

４年　蛭子　龍真

梅雨空は太陽を遮断する。それがあたかも太陽が顔を洗っているように見えたという。太陽を擬人化して身近な対象として見つめている。

つゆの日に雨さんまどをあらいます

２年　蛭子　和馬

梅雨の日には窓を締め切り、窓をたたく雨を避ける。横殴りの強い雨もあろう。その様子を、「雨さん」と親近感を抱いて、雨が窓を洗うと擬人化して見立ててところが子どもらしくややメルヘン的である。

小さな詩人たちの素敵な俳句作品に寸評を付す力もないが、筆者なりに子どもたちの心象を想像してみた。改めて子どもたちの豊かさに感銘を受けたことである。「♪　海と空とに囲まれて／周防に浮かぶ青い島・・・」の校歌の歌詞にもあるように、素晴らしい自然の中で祝島の子どもたちが心豊かに育っていくことを切に願うものである。

夏の海浮かぶ島影濃かりけり　　芳己

国道188号線から祝島を望む

「祝島不老長寿マラソン」最終回を終えて

大会実行委員長　國弘 秀人

2001年に祝島ネット21が発足し、「祝島の元気を発信しよう！」と一番最初のイベントとして始まった「祝島不老長寿マラソン」も今年でちょうど10年目（神舞の年はお休みしたので、今年が8回目）でした。 走る人も、応援する人も、ボランティアの人も、みんなが楽しめる大会にしたい、との想いで続けてきました。

スターター係

アナウンス係

最後尾＆救護係

給水所係

応援の皆さん

何人来てくれるかなぁ…と不安だった第1回大会。ふたを開けてみると1回目から100人以上の参加者が集まってくれました。そして、回を重ねるごとに参加者は増え、ここ数年は定員オーバーのため、締め切りもどんどん早くなっていきました。また、リピーターの方も多く、中には1回目からずっと出場されている方もいらっしゃいました。毎回、大会が終わった後に参加者の皆さんが「楽しかったです！来年もまた来ます！」と声をかけてくれたのがとてもうれしかったです。島の人たちの温かい応援、ボランティアのみなさんのもてなし、そして島のすばらしい景観など、ランナーの方々にとって、とても魅力的な大会になっていたのではないでしょうか。

そんな人気の大会も今回が最終回ということで、参加者の皆さんからは「残念です。本当に最後なんですか？」「またやるときは必ず来ますよ」という声をたくさんかけていただきました。島の人からも「せっかくここまで続けてきたのに、もったいないねえ」という話もありました。私自身も、できれば続けたいという想いはあるのですが、次のような理由で今回でひと区切りにしようと決めました。

先導バイク

移動給水係

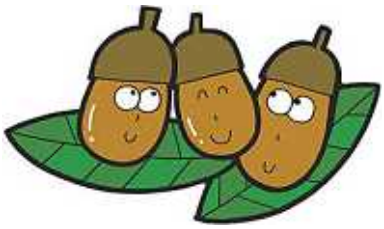
記録係

コース草刈り

「十年ひと昔」とよく言われますが、この10年間で祝島を取り巻く状況は大きく変わりました。祝島はテレビなどで数多く取り上げられ、映画も2本出来て、10年前と比較すると飛躍的に有名になり、たくさんの人が訪れてくれるようになりました。一方で、高齢化も進み、大きなイベントを開催するには体力的・時間的な負担が大きく、いろいろな面で徐々に運営が難しくなってきていました。そして、祝島ネット21の活動としても、会員をはじめとした祝島ファンの皆さんが、それぞれの場所で祝島のために活動できるような方向にシフトし、そして祝島に若者が帰って来られるように、雇用を創出するような活動に力を入れていきたいと考えて、今までマラソン大会の運営にかけてきた時間や労力をこういった新しい活動に振り向けていきたいと思っています。

大会を運営するにあたっては、本当に多くの皆さんのご支援・ご協力をいただき、ありがとうございました。またいつかこの大会が復活する時が来ましたら、その時はまたご協力よろしくお願いいたします。

お知らせ ＆ 募集



■2011年版カレンダー

もう来年のカレンダーを製作する季節になりました。カレンダーのデザインのアイデアをお持ちの方、あるいは「自分でデザインしたい」という方がいらっしゃいましたら、ぜひ事務局までご連絡ください。お待ちしています。10月末くらいにはデザインを決めたいと思っています。

■イベント支援について

会員の皆さんや祝島ファンの皆さんが、全国各地で祝島に関する展示や出店などを行い易いように、いろいろな支援体制を整えたいと考えています。展示用写真セット、パンフレット、その他展示物、販売用の商品、ユニフォームなどについてのアイデアをお持ちの方、そしてこれらの管理や発送などを担当していただける方は事務局までご連絡ください。

また、来年度は祝島ネット21としても、各地のイベント等に出展したいと考えています。全国各地で、こんなイベントがあります…という情報や、このイベントに出展したいので支援して欲しいなどの情報がありましたら、こちらも事務局まで。

■祝島へのUターン・Iターン促進について

毎年1人でも2人でも、祝島に若者がUターン・Ｉターンして仕事ができ、家族で暮らせるような仕組みが作れないかと考えています。これについてのアイデアや、全国各地でこういう取り組みをやっているという情報がありましたら、ぜひ提供してください。来年度以降はこの取り組みに力をいれたいと考えています。

◎祝島ネット21事務局　國弘秀人
電話 090-8069-5066　FAX 0833-48-6721　メール kunihiro@iwaishima.jp

編集後記

今回の会報は予定より約1ヶ月半遅れになってしまいました。大変申し訳ありません。来年以降は祝島ネット21の活動や運営について、いろいろと見直さないといけないと思っていますが、会報作りもその一つですね…。

さて、今回の「祝島の歴史を探る」は、「みせや」がテーマになっています。私たちの子どもの頃は、島内にたくさんお店があって、それぞれ特徴がありました。中でも「タロイ」はクジ引きや金魚すくいやパチンコ（玉が入るとガムが出る）など、子供心をくすぐるものがたくさんあって大好きでした。

私の両親も夏はアイスクリーム（祝島ではキャンデーと言う）を、冬はうどんの麺を作って島内のお店に卸していました。アイスクリームやうどんを作るところを見るのは結構楽しかったです。今私が事務所に改装している蓬莱館は当時「キャンデー屋」と呼ばれていて、ここでアイスクリームやうどんを作っていました。今でも島内では蓬莱館と言うよりキャンデー屋と言った方が通じます。当時は人口が多かったので、大晦日の年越しそばを作るのは本当に大変だったのを覚えています。当時は島の中だけでいろいろな商売が成り立っていたんですねぇ…。

次号は11月末に発行の予定です。がんばります！　（編集長：國弘秀人）

※事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。投稿はホームページからも可能になっておりますので、ご意見・ご感想・リクエストなど、お気軽に投稿してください。
※祝島ネット21では随時会員を募集しています。会費は1年間6000円です。
入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。

《発行》　祝島ネット２１事務局
〒742-1401　山口県熊毛郡上関町祝島
ホームページ　http://www.iwaishima.jp/inet21/

日暮れが早くなった。夕方の定期船から。